

第32番札所 高田(十一面)観音堂

69番札所から次の32番札所へ向う道を歩くと、あちこちに小さな祠ほこらがあります。中には壁をくり抜いた祠もあり、高田の人々がいかに神仏を敬っているかがわかります。

うな堂が2つ並んだ珍しい構造をしています。向かって左が篠栗四国の札所で、右が糟屋郡三十三観音霊場(郡中札)の第10番札所です。

糟屋郡三十三観音霊場は、若杉山の千手観音を第1番札所として久山や須恵、志免、宇美など旧表粕屋郡を巡る旅です。

33か所のうち8か所が篠栗町内にあります。

高田十一面観音堂は、篠栗四国の札所としてよりも、観音霊場の札所としての方が長い歴史を持っています。すでに1798年の『筑前国続風土記附録』には、高田村の項に「観

音堂ムラカミ」と書いてあります。1861年の『筑前国続風土記拾遺』には「村上壽行菴」と書かれました。眼病にご利益があることから「慈眼堂」とされることもあります。

地元では「火除け観音」とも呼んでいます。堂が火事になったときに周囲が類焼をまぬがれたことや、なぜか観音像が裏の林へ出ていったなど、不思議なことがあったのでついた名前だといえます。

一方の篠栗札所の本尊は、長澤熊吉さんが発起人となり、博多下魚町の森部藤太郎さんら11人が世話人となって昭和7年に奉納したものです。境内の十三仏も森部さんが世話人となっ

ています。

ところで、境内には古い石塔も残っています。「三界万靈塔」の裏面には、

文化八年

辛未

施主 柳地次吉

の銘があり、「南無馬頭観世音菩薩」の裏には、

弘化四年丁未 高田村

十月吉祥鳥 養育方治内

の銘があることから、それぞれ1811年、1847年の建立とわかります。篠栗では今から200年近くも前の遺産が、ごく身近に存在し、いつでも拝見できます。実に素晴らしいことです。

日仏共同篠栗民俗調査団
慶應義塾大学非常勤講師

中山 和久

篠栗歴史編路編【その6】

神仏や先祖、精霊といった目に見えない存在を大切にす。愛情や信頼、人と人との絆よろこなど、やはり目に見えないものを大切にする心をはぐくんではいるのでしょうか。

さて、32番札所は同じよ

